

郷土博 通信

No.7

2016 春



貝合せの貝（江戸時代・解説10頁）

CONTENTS

■ 貝合せの貝	1	■ 郷土博物館のあゆみ (6)	7~9
■ 展示室紹介・関連記事	2~4	■ 貝合せ ~いにしへの雅な遊び~	10
■ 近代天文学のはじまりと大阪	5~7	■ 和綴じノートづくり体験講座・第7回公開講座お知らせ	10



第1展示室

— 御内御用測量下図(西)に記された「アジ石出場」 —

当展示室では、館蔵岩石資料のうち石材として利用されてきた凝灰岩、安山岩、花崗岩について県下の代表的産地の原石と関連する資料を展示しています。ここでは高松市で産出する良質な花崗岩、^{あじいし}庵治石の資料についてご紹介します。

庵治石の産地は五剣山西麓で、現在は高松市庵治町・牟礼町境を中心に丁場(採掘場)が分布します。この地域での採掘の歴史をたどる資料が久米通賢の仕事の中に見られます。

通賢が作製した「御内御用測量下図(西)」の庵治半島西側海岸部分(図①)には「アジ石出場」の記載があります。同じ場所を測量時の野帳「側(測)量絵図帳」で探すと、「小丸山」の測量記録の2丁後に「アシ石/出シ場」の文字と地形のスケッチが見いだせます(図②)。「出シ場」とは、丁場で採り出し、用途に応じ粗く加工した石を山から降ろし、他所に搬出する場所と考えられます。ここでは、地形から見て山際^{いしやま}の海浜から舟を利用して出していたのでしょうか。そして、「アシ(ジ)石」とあることから測量の実施された文化3年(1806)にはすでに附近一帯から産出する石が「アジイシ」と呼ばれていたこともわかります。

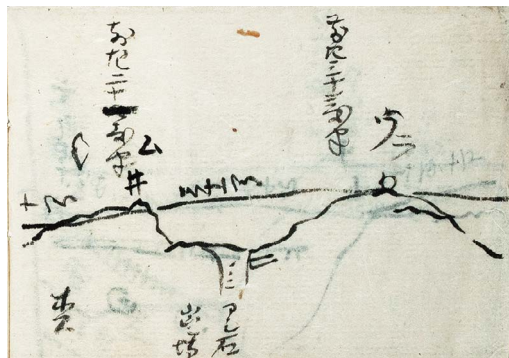
ところで、「出シ場」は現在のどの辺りになるのでしょうか。現地を歩くと、以前は旧道沿いにあった海岸線が埋め立てによって西に移動しているが、図③-1の○印附近、女体山西側(多くの丁場があり、開削時期が古いと伝えられる)の石山の登り口下方がその場所ではないかと推測できます。また、登り口近辺からなだらかに下っていく道(図③-2)はもともと「出シ場」に至る石出し道であったと考えられます。

庵治半島での花崗岩の採掘と加工が盛んになるのは、庵治町内の伝承や石造物の研究によって18世紀に入ってからといわれています。しかし、古い時期の丁場の所在については、海岸部や山中に古いヤ穴^{くさび}(石を割る楔を入れる穴)を持つ石が残るものの明確ではありません。作製年代がわかるこの二つの資料は丁場の変遷や石材産地としての成立時期を考える上での基礎的資料であると言えます。

(廣瀬 永津子)



▲①御内御用測量下図(西)部分



▲②側(測)量絵図帳 三木郡(文化3年)部分



▲③-1 高松市庵治町 丸山附近



▲③-2 旧石出し道か(拡幅されている)

第2展示室

久米通賢の坂出塩田開発(その1)

— 西新開・東新開の「御口銀元帳」「御冥加元帳」 —

久米通賢による坂出の塩田開発は高松藩の財政立て直し策の一つとして、文政7年(1824)10月に通賢が藩に提出したいわゆる建白書を発端として始まりました。文政9年1月から始まった西新開の開発が完成したあと、中(東)新開、江尻新開と順次開発され、天保6年(1835)に全体として完成したと考えられています。

当館が所蔵する久米通賢関係資料の中に、坂出塩田で製塩が始められた天保期ごろのものと思われる「西新開浜方・中新開浜方」の「御口銀元帳」と「御冥加元帳」という2冊の帳簿が残されています。2冊のいずれも、塩田1区画(「一軒前」)ごとの等級、沼井台(濾過器)数、地番(区画番号)、請負人名(塩の生産者名)が記されています(▼写真「御口銀元帳」)。

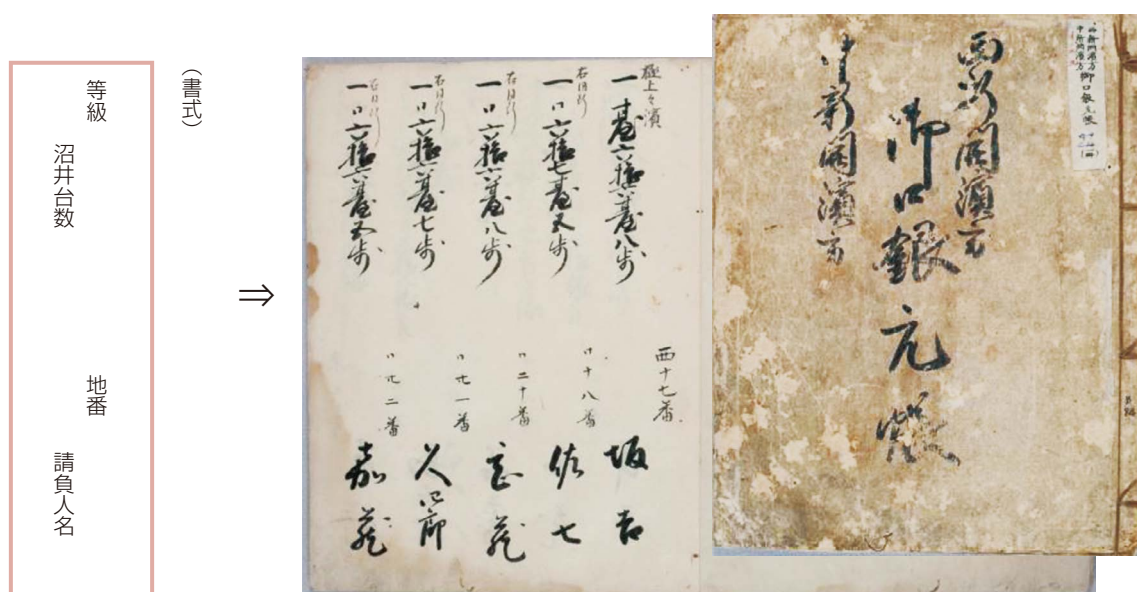
「一軒前」とは、塩釜1個の経営に要する塩田の単位です。坂出の場合、一軒前あたりの沼井台は65台(8間四方に1台の割合で、1列13台×5列)前後設置されていました。

「御口銀元帳」では一軒前あたりの塩の生産量の多寡で等級が決められ、最上級の「極上々浜」から最下級の「下浜」までの10等級が設定されています。生産者69人の塩の生産総量16万6千俵余に対して約50貫(1俵につき銀3分)の御口銀が課税されています。

また、「御冥加元帳」では最上級の「極上々浜」から最下級の「下々ノ中浜」までの15等級が設定され、生産者71人が使用する沼井台の総数4,800台余に対して65貫余(1台につき銀16匁6分から11匁)の御冥加銀が課税されています。

この2冊の帳簿では、塩の生産者は、「御口銀」と「御冥加銀」の税を負担していますが、御口銀に関して久米通賢は、過納分については「暮節季に浜百姓へさし戻すつもり」とであると記した資料(「東新開諸積心覚」)が残っていて、藩の財政向上策ばかりでなく、生産者にも配慮した税制を考えていたことがうかがえます。

(齊藤 祐司)



▲「西新開浜方・中新開浜方 御口銀元帳」(表紙と第3丁)

第3展示室

花鳥風月 ～ 描かれた花と鳥 ～

古くより、人びとは太陽の動きや月の満ち欠けをはじめ、気象や身の回りに現れる動植物の変化などから、時の流れを敏感に感じとってきました。とくに四季の移り変わりが明確な日本では、日常の暮らしの中に自然が強く意識され、その自然観は日本人の豊かな感性、美意識、表現力、さらには寛容な心を育んできたとも言われています。

日本最古の和歌集である『万葉集』に、四季折々の自然の風景や風情が多く詠まれて以来、それらを題材にした詩歌や書画を楽しむ多数の風流韻事が生まれ、現在も形態を変えながら受け継がれています。

人びとはとりわけ、最も身近にある、折々に咲き誇る花々や鳥たちに命の輝きを感じたのではないのでしょうか。日本で花や鳥の絵が屏風や襖などの大画面に描かれ始めたのは、鎌倉時代末期のことでした。室町時代になると宋・元時代の漢画系花鳥画の影響を受けて障屏画しょうへいが多く描かれるなど、次第に流行の兆しをみせるようになりました。さらに桃山時代には狩野派が漢画系のものに伝統的な大和絵の手法を取り入れて豪華絢爛な金碧きんぺきの花鳥画を確立し、全盛を極めました。その後、土佐派や琳派の作家をはじめ、円山派、四条派、文人画、浮世絵画、さらには洋風画の人びとにより、さまざまな様式や内容が取り込まれて庶民の間でも大いに流行しました。

科学の急速な進歩によって、その弊害も多く表れ始め、変わりゆく自然や社会とどう向き合い、共生していくかが問われているような現在だからこそ、人間本来の感性を十分働かせながら自然の中でゆったりと(少なくとも現代人よりは)生きてであろう先人に、時には学びたいものです。

今回の展示では花鳥画をはじめ、それらが文様にあしらわれた陶磁器や漆器、併せて、四季の移り変わりが詠まれた歌集などもご紹介いたします。美しい自然の風景と風雅な趣を感じていただけたら幸いです。

(吉久 由紀子)



▲四季花鳥図屏風・右隻 藍瑛(1585～1664後)写 中国明末清初の画家。山水、人物、花鳥画を能くした。

近代天文学のはじまりと大阪

第6回公開講座から

嘉数 次人(大阪市立科学館主任学芸員)

今日は「近代天文学のはじまりと大阪」というタイトルでお話をさせていただきます。江戸時代、この讃岐が生んだ有名な科学者である久米通賢は、19歳で大阪に出て間重富という天文学者の下で学びました。当時の大阪は、日本でもっとも先進的な天文学研究が行われていて、通賢は最先端の科学を学んだ成果を、後のさまざまな活動に活かしています。そこで今日のお話では、若き通賢が見たであろう時代を中心とした大阪での天文学の様子を、ご紹介したいと思います。

暦作りをメインとした江戸の天文学

さて、本題に入る前に江戸時代の天文学の概略を紹介します。実は当時の天文学は現在の天文学の目的とは異なり、正確な暦作りを目的とする学問でした。それは、かつて中国から伝えられた考え方に、暦は支配者が発行するものであると位置付けされていたからです。さらに当時の暦は、複雑な天体の動きを把握して作る太陰太陽暦でしたので、高度な観測と理論を積み上げるためには、熱心な研究が必要でした。

日本では古代から中国から輸入した暦計算法を使っていましたが、17世紀後半に渋川春海が中国の授時暦を日本の天象に合うように改良した貞享暦を作成し、1685年から施行されました。これが初めての国産の暦です。そして幕府は改暦を成功させた渋川春海の功績を称えて、初代幕府天文方に任命しました。

西洋天文学の流入と徳川吉宗

貞享暦以降、日本では国産の暦法を作成するようになります。しかし必ずしも順調ではありませんでした。八代将軍徳川吉宗は改暦を志して断行し、その結果1755年に宝暦暦への改暦が行われますが、結果的にできあがった暦法は貞享暦を改悪したとも評される程のものだったのです。

改暦が失敗した原因の一つには、時期尚早だったことが挙げられます。実は、吉宗は少しずつ入り始めた西洋天文学の成果を取り入れた改暦を行いたかったのです。そのために、西洋科学を記述した中国書の

輸入制限を緩和する措置も行います。しかし、西洋天文学の成果を十分に理解した人材が育たないうちに改暦を行ったため、失敗したのです。

大阪で花開いた麻田剛立の天文学

改暦は失敗したものの、吉宗が蒔いた種はゆっくりと芽を出します。彼が輸入制限を緩和した漢訳天文書は少しずつ国内に広まり、それを学んだ天文学者が登場しはじめるのです。その一人が、豊後の杵築藩士であった麻田剛立(1734~1799)です。麻田剛立はもとの名を綾部妥彰といい、幼いころから天文学と医学を学び、杵築藩の藩医に抜擢されます。一方で、妥彰は天文学にも秀でていて、1763年には暦に記載されていなかった日食を独自に予報して的中させるなど、在野の研究者として有名になっていました。しかしながら、藩医の仕事は多忙だったため、好きな天文学に集中できません。そこで38歳の頃、ついに杵築藩を去って大阪に出て、名を麻田剛立と改めます。そして医を業としつつ、天文学の研究に専念したのです。

麻田剛立の天文学は、大阪で進化します。『崇禎暦書』などの漢訳天文書に基づいて、西洋天文学を取り入れた新しい理論を導入します。加えて、垂球や子午線儀などの観測機器を自ら作成・改良して利用し、観測精度を高めて詳細なデータを蓄積します。それにより、得られたデータを自らの理論にフィードバックするという、近代的な研究方法を取り入れたのです。また、学問の流派といった狭い視野にとらわれず、土佐や伊勢といった他の地域で活動する研究者とも密接に情報交換を行い、広くレベル向上も行いました。その結果、独自の暦法である「時中法」や、一年の長さをはじめとした様々な天文常数が徐々に変化するとした「消長法」を考案するなど、研究が進化していきました。

すると麻田剛立に入門する人が集まりだし、やがて麻田学派ともいべき集団が形成されます。中でも高弟として知られたのが大阪定番同心であった高橋至時と、大阪市中で質屋を営む町人の間重富の二人です。高橋至時は数学を得意とし、天文学の理論研究において秀でた才能を発揮しました。また間重富は機



巧の才に長け、精密な天体観測を得意としました。さらに豊富な財力を用いて自ら設計した垂揺球儀などの観測機器を製作し、観測精度の向上にも大きく貢献しています。その他にも、富山藩で天文を講じた西村太冲、のちに幕府天文方となる足立信頭といった人物も高弟として知られています。

麻田学派の台頭

そんな麻田学派の学問が飛躍的に高まるのが、漢訳天文書『暦象考成後編』の入手です。これは1742年に編纂された天文書で、太陽と月の運動論にケプラーの楕円軌道論を導入するなど、新しい理論を解説しているのが特徴です。この『暦象考成後編』は、18世紀末の日本にはわずか二、三部ほどしか輸入されていない珍本でしたが、麻田の高弟であった間重富が広い交友関係を利用し、同書を所蔵していた桑名藩主松平忠和から入手することに成功したのです。重富はさっそく剛立と同門の高橋至時の三人による共同研究を開始し、その内容をマスターすることができたのです。同書は陰陽寮や幕府天文方の人々もまだ理解していなかったことから、麻田学派が実力において一歩抜き出ることになりました。

寛政の改暦へ

その頃、宝暦の改暦に失敗した幕府では西洋天文学を用いた暦法への改暦を行うための模索が続けていましたが、力のある人材がいいため実行に踏み込めません。そこで目を付けたのが麻田学派です。1795年3月、幕府は麻田剛立の高弟であった高橋至時と間重富の二人に対し、暦学御用により江戸への出府を命じました。そして幕臣であった高橋至時は同年11月に天文方に昇進し、また町人であった重富も天文方と同列で暦法を議論するように命じられています。こうして準備を整えた幕府は、ついに翌1796年に改暦の命を下しました。その結果、高橋至時が中心となって新しい暦法が作られ、陰陽寮を通じて改暦を奏上、名を寛政暦と賜り、1798年から施行されました。

寛政暦は『暦象考成後編』に基づいて太陽と月の位置計算法や日月食計算法を作成し、また『暦象考成上下編』の五星法を導入しており、日本で西洋天文学を導入した最初の暦法となりました。また、麻田剛立が考案した消長法も暦法に取り入れられているのが特徴となっています。

麻田学派の天文学が主流に

寛政改暦を成功させた高橋至時は、天文方として江戸で研究を続けます。これを機に、大阪で麻田剛立が培った新しい暦学の研究スタイルは幕府天文方の主流となり、その流れは幕末まで継続することになります。

その後、高橋は1803年に「ランデ暦書」と呼ばれる蘭書を入手したことで、大きく研究を発展させます。ランデ暦書はフランス人天文学者ランドが著した『天文学』の蘭訳本のことで、18世紀中ごろの西洋天文学を網羅した名著です。これを入手した高橋は、オランダ語が十分に読めない中で解読を行い、半年余りの期間に約二千ページもの研究ノートを書き上げます。しかし、猛烈な研究がもともと病弱だった至時の体を蝕み、翌年に41歳という若さでこの世を去ってしまいます。

蘭書を通じて西洋天文学を直接導入するという画期的な研究を切り開いた至時でしたが、翻訳は道半ばで終わりました。しかしその遺志は天文方の後進に受け継がれて翻訳が続けられ、その結果、1844年に同書に基づいた天保暦への改暦に成功しています。

大阪で育った近代科学

さて、改暦に携わった間重富は事業終了後に大阪に戻り、家業の傍らで研究を継続しました。同時に幕府の天文御用を勤め、それ以降間家では幕末まで四代にわたって天文方をサポートし、大阪での天文学研究の中心としての役割を果たしました。

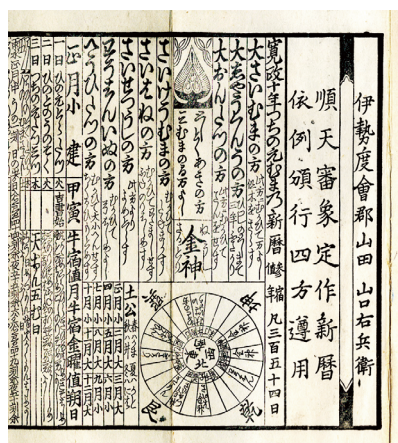
また間重富は、西洋科学を直接吸収するためにはオランダ語が重要であることに気付き、橋本宗吉という優秀な若者をサポートしてオランダ語を習得させます。そこで宗吉は大阪で最初の蘭学者となりました。そして宗吉の弟子であった医師・中天游は、弟子入りした緒方洪庵を蘭学者に育てます。その結果、洪庵は適塾を開き、研究と教育に力を入れました。適塾の門下生には、福沢諭吉や大村益次郎といった人物もいます。従って、麻田剛立が大阪で蒔いた種はのちの時代に大きく花開き、日本の近代化を推し進めたといっても過言ではないでしょう。

そんな大阪の天文学が輝いていた頃に19歳で大阪に来た久米通賢は、科学者たちのパワーみなぎる活動を目の当たりにして、大いに刺激を受けたことと思います。

近代天文学のはじまりと大阪 第6回公開講座から 参考図版



▲『曆象考成後編』



▲寛政暦が施行された寛政10年(1798)のこよみ

郷土博物館のあゆみ (6) 物産展示への展開

大正15年の第2回展示

郷土博物館が大正14年(1925)5月24日に初開館したことは前号で述べた。その第1回展示は毎週土曜日1日のみの開館であったが、1年間継続したのち、展示替えをして第2回展示を行うことになった。1年後ということであれば大正15年5月下旬開館ということになるが、2年目の展示替え開館は6月下旬にずれ込んだ。以後ほとんど毎年遅れが重り、やがて昭和7年頃からは11月、12月の展示替えになってゆく。

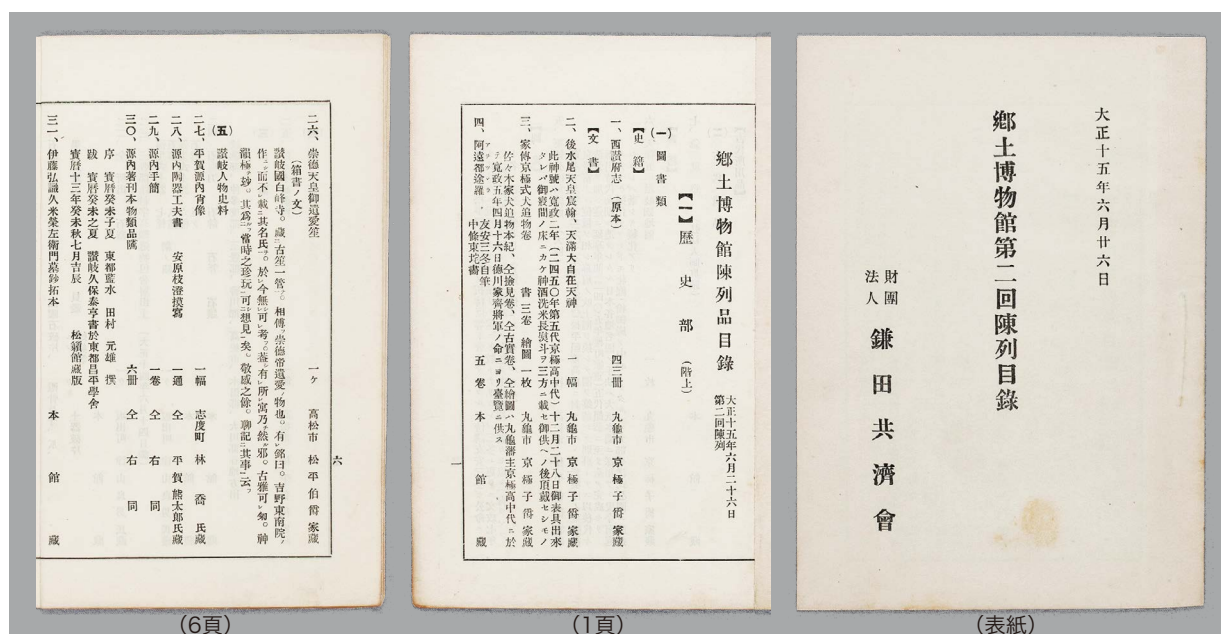
2回目の展示は第1回と同じく館蔵資料の他、多くを県内各地の所蔵者から借用して行った。展示は毎年新たな資料を展示するが、資料の所在情報は博物館主事岡田唯吉の日頃の探索の積み重ねによるところが大きかった。調査部主事でもあった岡田は主として県内で種々の調査を行うことを通じて資料(史料)の所在の把握をしていった。岡田は「陳列品ノ蒐集、撰択ニハ深重ナル研究ヲナスコト……館ノ生命」「県下唯一ノ博物館ナレバ一般人士ノ注意ヲ引ク丈蒐集陳列上ノ責任重キヲ感ス」とその作業の重要性を述べている。

展示替えの準備は大正15年1月から始まった。展示品の借用は最初3月までに終了するとしていたが間に

合わず、資料借用が実際に開始されたのは15年4月以降で、6月になっても続いた。そして6月5日(土曜日)が第1回展示の最終観覧日となった。前年5月24日以来、開館日数53日、観覧者3,515人、1日平均66人である。

第2回展示の開始を6月26日(土曜日)と決め、やっと24日になって陳列に着手して開館にこぎ着け、観覧者に『郷土博物館第二回陳列目録』を配布した(8頁写真参照)。この目録によると、展示内容は【1】歴史部として、1図書類(史籍・文書・図画・書籍)、2古代遺品類(古代遺品・古墳発掘品・窯跡発掘品・石器時代遺物)、3武器、4楽器、5讃岐人物史料(久米栄左衛門部)、6宗教関係品に分類されている。第1回展示にあった美術部と美術工芸部は除かれている。

1図書類の史籍は「西讃府志」原本、文書は「後水尾天皇宸翰」、図画は「栗林公園旧絵図」などである。4楽器は「崇徳天皇御遺愛笙^{しょうとう}」である。これらはいずれも高松松平家、丸亀京極家の蔵品である。5讃岐人物史料は量的に多く、平賀源内関係、伊藤弘(南岳)関係、維新勤皇家小橋氏関係、久米栄左衛門関係である。久米資料は第1回展示から出品されたが、さらに内容



▲「郷土博物館第二回陳列目録」

が追加された。展示品総数113件であり、うち52件は久米通賢資料である。

30日には出品者を博物館に招待し、謝状と記念品を贈り、岡田主事から詳細な展示説明がなされた。その後参加者との懇談があり、さらに晩餐会を催した。これは以後毎年恒例となる。

博物館1階の展示

郷土博物館は2階建てだが、大正14年の第1回展示は階上(2階)だけで行われ、1階は使われなかった。それに対して第2回展示では1階も使用された。ただし2階での歴史部門の展示が6月26日に先行して開館したのである。『第二回陳列目録』の冒頭に開館日付とともに「【一】歴史部(階上)」とあるのはそれを示している。

そもそも「階下」は北東の一廓を事務室が占め、他は北側に面した入口と2階への階段、その他は展示空間であった(9頁図参照)。事務室は博物館の事務スペースとして設けられたものの、博物館が週1日の開館となり、開館日の毎週土曜日に当番職員の滞在場所として使われただけであった。博物館の事務は図書館2階の調査部室で行われた。

博物館建設当初から1階も当然展示室としての利用計画が立てられていた。調査部・博物館の記録によると大正13年の秋の段階で、

「陳列品 階下＝県下重要物産の一部及び著名の天然記念物
階上＝本県史料」

と階下と階上の展示方針が示されており、両階とも「陳列戸棚」(展示ケース)の設置工事も行われた。

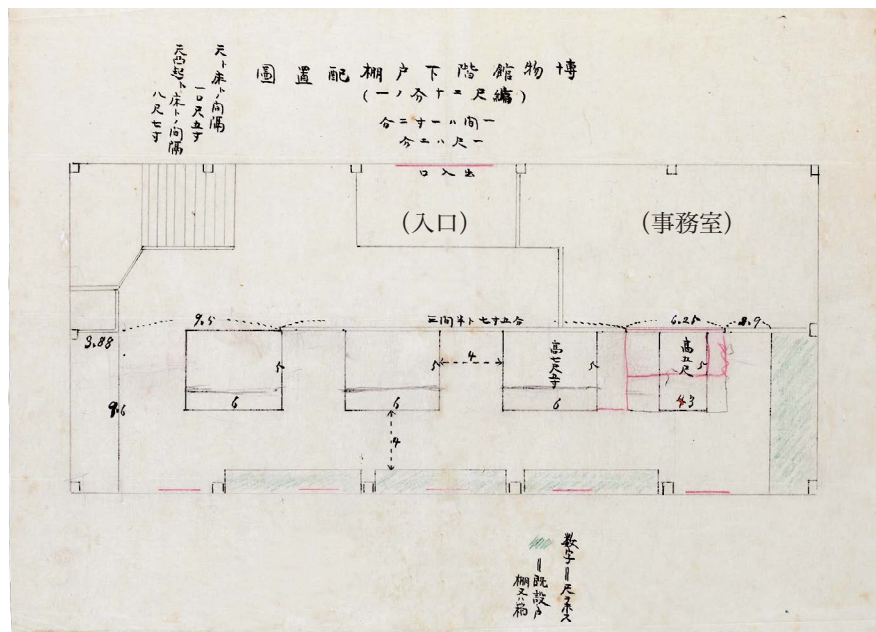
2階(階上)は第1回、第2回展示ともほぼ「本県史料」の展示が実施された。第1回展示が2階の展示だけであったのは、多分博物館として最初の展示ということもあり、歴史部門と性格の異なる1階展示まで手が回らなかったのであろう。

だが博物館開館後の大正14年秋には15年度の1階展示の計画が動き始めていた。すなわち陳列戸棚として大戸棚1個、小戸棚3個の追加設置が決まった。また大正15年1月には事務室にも考古品陳列棚の設置案が出された。これは用途の少ない事務室の展示室化でもある。この戸棚は「古瓦中ノ優等品ヲ特別ニ取出シ陳列スル爲」に用いられる。

1階(階下)展示業務は6月26日の2階展示の一般公開以後から着手され、新規戸棚の設置もなされた。

物産展示の展開

さて1階の事務室以外の場所には上記のように「県下重要物産の一部及び著名の天然記念物」を展示するとあるが、その後「天然記念物」は取りやめになり、もっぱら「県下重要物産」の展示場となる。その「物産」とは何であろうか。1階展示に関する記録によると、2階の「歴史部」に対して1階は「地理部」あるいは「産業部」と称されており、実際に展示されたのは屋島焼、御厩焼、素麺、団扇、和紙、漆器などの地域の特産品が多いが、漁網、売薬、砂糖、食卓塩、工業薬品、刃物、人造



▲大正15年「博物館階下戸棚配置図」 新規陳列戸棚が4台並ぶ

真珠、石鯨、傘、下駄、マッチ、醤油、手袋、靴、讃岐上布、その他多数にのぼる。岡田は『鎌田共済会雑誌』17～22号(昭和2年5月～同3年3月)に「讃岐物産の誇」を連載し詳述している。

これらのものを展示する目的は「産業奨励ニ資セン爲」としている。博物館で産業奨励のために物産を展示することはいささか奇異な感があるが、明治初期の博物館濫觴期には「古器旧物」とともに殖産興業に資するものとして各種の物産が展示されたし、勧業博覧会は博物館と密接に結びついていた。続いて出来た地方博物館の多くは殖産興業政策の地方機関としての性格を持った。ただし当郷土博物館が開館したのは大正時代末期であり、すでに博物館と物産展示は分離していた時期である。

一方、勧業政策を担う地方組織として明治時代から大正期にかけて物産陳列所が道府県に続々と作られた。大正期には各府県に1つ以上の割合で設置され、道府県郡立の他、私立の陳列所もあり、農業・工業・商業を奨励するための様々な活動を行った。

香川県では明治32年(1899)に栗林公園内に香川県博物館が開館し物産展示も行っていたが、明治35年に香川県物産陳列所となり、大正10年に香川県商品陳列所と改称、昭和13年(1938)にはさらに香川県商工奨励館となった。現在は商工奨励館の名で残された建物が公園施設として活用されている。

博物館1階に物産展示をするに際して、岡田は県商品陳列所を視察し、また県勧業課長に以下の問い合

わせをした。物産の収集、展示品の解説に必要としたのであろう。

- ・ 本県の著名物産の種類、産額、価格、主要産地、主要販路
- ・ 本県で将来発達させる必要ある物産
- ・ 本県産業奨励施設の主なものとその根本方針
- ・ 本県産業発達の功労者
- ・ 本県産業に関する調査物、統計表等

他方、陳列用物産の収集、購入を大車輪で進め、展示に際しては県商工技手の援助を受けた。

11月6日に「物産陳列および解説」を終了しているから、この頃に一般公開したのであろう。これ以後毎年、物産の増補、取り替えをして充実を図った。その後昭和14年に共済会敷地の北端に2階建て建物を作り、その2階を博物館附属物産館とし博物館本体から分離した施設となる。(本紙第2号8頁「旧鎌田共済会諸施設図」参照、1階は児童図書館)。

以上のように物産展示に意を注いだ理由は、鎌田共済会頭鎌田勝太郎が政治家である一方、会社経営に関わる実業人であったので、香川県の産業発達に資する施設の必要性を考えた可能性がある。また岡田は「県商品陳列所の欠陥を補う」としているから、商業振興に重点を置いた商品陳列所に対し、産業奨励に軸足を置く展示を行う意義があると考えたようである。

(参考・引用文献)

三宅拓也『近代日本〈陳列所〉研究』思文閣出版 2015年2月

(学芸・あゆみ班)

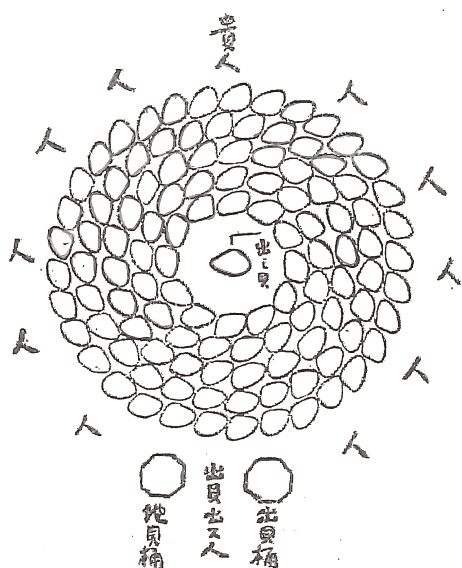
「貝合せ」は、平安時代の貴族を中心に流行した、さまざまな物を合わせて優劣を競う「物合せ」と呼ばれる遊戯のひとつで、美しい種々の貝殻を持ち寄り、形や色合い、珍しさを競いました。

しかし、このような本来の「貝合せ」は平安時代の末頃になると次第に廃れ、「貝覆い」と呼ばれる遊びとなりました。これは、蛤の貝殻360個を一組とし、それぞれを身と蓋に分け、片方を地貝として座に伏せて並べ、他方の出貝を一個ずつ出し、貝の形や模様からそれに合うものを探し出して一対に合わせるもので、やがて、この遊びもまた「貝合せ」と呼ばれるようになりました。

のちに、一対の貝の内側には「源氏物語」や「伊勢物語」などの物語絵や花鳥等の同趣の絵が極彩色で描かれるようになり、さらに時代が下ると、貝合せの貝は、蒔絵などが施された豪華な一対の貝桶に収められ、公家や大名家の婚礼調度の一つとなりました。他の貝とは決して合わない特性から、夫婦円満や二度の縁のないようにとの願いが込められていたようです。

この雅な遊びや風習は近代以降にはすっかり影を潜めてしまいましたが、段飾りのお雛様の道具には貝桶が添えられているものがあり、その名残を留めています。

掌てのひらによく収まる程の大きさの貝は、2枚の貝がぴったりと合うと掌の中で、カチリと音がします。はるか昔の女性たちは、この響きに胸を躍らせながら、遊びに興じていたのでしょうか。(第3室展示) (吉久 由紀子)



▲(矢倉和三郎著『趣味研究介類叢話』-大正11年刊-より)

INFORMATION

■ 和綴じノートづくり体験講座

平成28年7月30日(土) 13:30~15:30

会場: 鎌田共済会郷土博物館2階講堂

講師: 平田 正和(工房レストア代表取締役社長)

(申込期間7月3日~7月24日、先着30名、参加料500円)

■ 鎌田共済会郷土博物館第7回公開講座

「天皇と将軍の華麗なるパレード — 江戸初期行幸図屏風の世界 —」

平成28年10月8日(土) 13:30~15:00(開場13:00)

会場: 鎌田共済会郷土博物館2階講堂

講師: 実方 葉子(さねかた ようこ 泉屋博物館学芸課主査)

(申込期間 9月1日~10月2日、先着40名、参加無料)

電話・FAXかHPのフォームからお申込み下さい。

電話: 0877-46-2275 FAX: 0877-45-0035

HP: <http://www.kamahaku.jp/>

■ 助成事業について

当財団は人材の育成・教育の普及・学術文化の向上および社会福祉の充実に寄与する地域の団体または個人に財政的援助を行っています。随時募集していますので、ご希望の方は当会に助成金申請書を請求し、必要事項を記入し提出して下さい。助成の可否および金額は、事業の規模・内容を考慮して理事会で決定します。

詳しくは、公益財団法人 鎌田共済会 事務局

(電話 0877-45-0033)までお問い合わせ下さい。

鎌田共済会郷土博物館



Access

高松から…快速マリンライナーで約15分

岡山から…快速マリンライナーで約40分

JR予讃線坂出駅から徒歩5分

※駐車場あり

開館時間: 午前9時30分~午後4時30分 (入館は4時まで)

休館日: 月曜日/祝祭日

夏季特別 (8月13日~15日)

年末年始 (12月29日~1月4日)

入館料: 無料